

# 補剤で脾胃を整えることが重要

JA静岡厚生連 静岡厚生病院 産婦人科 中山 毅 先生



1997年 京都府立医科大学医学部 卒業  
同 年 京都府立医科大学附属病院 研修  
2004年 京都府立医科大学大学院 女性生涯医学課程 卒業  
2005年 京都府立与謝の海病院  
2006年 JA静岡厚生連静岡厚生病院

駿府城にほど近い市街地に位置するJA静岡厚生連 静岡厚生病院は、地域住民の暮らしに根差した病院として長年にわたり地域医療に貢献している。同院産婦人科診療部長の中山毅先生は、産婦人科医療に漢方を組み入れることでより高い治療効果を得ていることに加え、最近開設された漢方専門外来である「漢方内科」の診療部長として、さらに漢方治療の幅を広げておられる。そこで、中山先生にこれからの医療における漢方の役割について、その一端をお伺いした。

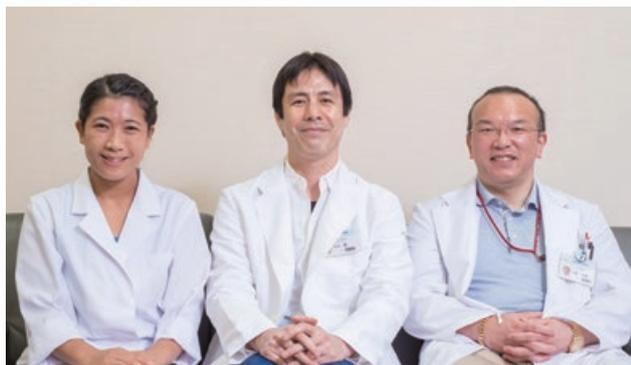
## 静岡市中心部で長年、地域医療に貢献

当院は1933年に医療利用組合更生病院として設立され、1943年には静岡厚生病院と改称、そして1946年には現在地に移転しました。現在ではJA静岡厚生連の系列4病院の一つとして、急性期から回復期、慢性期、在宅療養まで一貫した医療を提供できる環境を整えており、長年、静岡市中心部における地域医療に貢献しています。

さらに当院は、健康管理センターを併設し、健診、ドック、健診後のサポートを通じて、地域の皆様の健康管理、疾患予防のお手伝いもしています。

当院の理念である「愛される病院を目指します」を院長

### ●静岡厚生病院 産婦人科を支える先生方



左から、鈴木 京子 先生、中山 毅 先生、石橋 武蔵 先生

以下、全員が一丸となって実践しており、われわれ職員も非常に働き甲斐のある病院です。

## 当院産婦人科の特徴 -FT外来と更年期外来-

当院の産婦人科は幅広く産婦人科診療を行いながら、さらに特徴ある診療科を目指しています。その一つがFT（卵管鏡下卵管形成術）です。

卵管閉塞・狭窄などの卵管因子が原因の不妊症は不妊原因の2~3割といわれていますが、FTはカテーテルを挿入することで卵管を拡張し、自然妊娠に導く高度な技術です。健康保険や高額療養費制度の適応にもなりますし、体外受精によらない不妊症の治療法であることから、当院では改めてFTを見直そうということで、わが国初の「FT外来」（担当：西原富次郎先生）を2017年5月に開設しました。

もう一つの特徴は、2017年4月に開設した「更年期外来」（担当：石橋武蔵先生）です。更年期外来では、一人の患者さんに時間をかけてじっくりとお話を伺いながら、漢方治療はもちろんのこと、ホルモン補充療法や精神科治療も含め、患者さんに適した治療を行っています。

この他にも当院では、良性腫瘍や不妊症などの治療において内視鏡手術の技術認定医による手術的なサポートも積極的に行っています。

## 当院における漢方診療について —「漢方内科」を新たに開設—

産婦人科における漢方の出番は多岐にわたります。たとえば、周産期領域では悪阻、切迫流産の腹痛や感冒などの妊娠中のマイナートラブルや、婦人科領域では更年期障害や月経異常を伴う疾患も漢方が奏効する分野です。たとえば悪阻は、その原因によって処方選択を考える必要があります。脾胃に水滯がある患者さんには小半夏茯苓湯が有効な場合もありますが、気虚がベースにある場合は六君子湯、気滯が強い場合は半夏厚朴湯、脾胃の冷えがある場合は人参湯などが選択肢として挙げられます。

私は日常診療に漢方を積極的に組み入れています。産婦人科を受診される患者さんに限らず、漢方の素晴らしさをさらに多くの患者さんに実感していただきたいという強い思いを抱き、病院の全面的なご支援をいただいて『漢方内科』を2017年6月に開設しました。

## 現代人の多くは補剤によって脾胃を整えることが必要

私が漢方に興味を抱くようになったきっかけは、帝王切開術後に癒着性イレウスに対する大建中湯が著効した症例です。外科から再手術が妥当と指摘されましたが、保存的治療を患者さんが強く希望されました。そこで大建中湯を処方したところ、急激に腸閉塞が改善され、経過良好となり退院に至りました。また不育症にて柴苓湯を内服された患者さんの多くが早期に妊娠することに気づき、柴苓湯が卵巣機能不全による不妊治療に有用である可能性を考え、不妊治療に併用し服用いただいたところ、多くの方が妊娠成立されました。これらの経験をとおして「漢方はすごい！」と気づかされ、多くの先生にご指導をいただきながら漢方の研鑽を続けています。

最近では、八味丸や補中益気湯などの補剤を処方する機会が多くあり、種々の疾患や症状を有する患者さんの中に補剤が奏効する割合が非常に高いと感じています。その背景には、現代人は脾胃が弱っている方が多いことが考えられます。したがって、まずは脾胃を整えるために補中益気湯をベースとした治療の重要性を感じています。また、当帰芍薬散を処方しても、当帰が合わないため服用できないという方がいらっしゃいますが、このような場合は補中益気湯で脾胃を整えてから当帰芍薬散による補血をすることで、治療がうまくいくこともあります。



この他にも、不妊治療における補中益気湯の“夫婦同服”の可能性を検討しています。挙児を希望されながらもなかなか結果が得られない時、ご夫婦ともに気滯から気虚の状況になると考えたからです。実際に、補中益気湯の夫婦同服による妊娠成立例も経験しました。

## これからの産婦人科医療における漢方治療の位置づけ

これからの医療において西洋医学は不可欠であり、今後さらに発展することは間違いありません。しかし、西洋医学的治療だけでは必ずしも良好な結果が得られない場合も多くあります。そのようなときに東洋医学的なアプローチを幅広く応用することで、より患者さんの治療満足度も高まり、漢方の良さを患者さんに還元できると思います。先にご紹介したように、補剤で脾胃を整えることによって、西洋医学的治療がより奏効する、あるいは副作用を減じる可能性もあると思います。

私自身もこれからは、鈴木京子先生のような若い先生のお力添えをいただきながら、産婦人科、漢方内科を通じて幅広く漢方診療ができる医師になりたいと思いますし、漢方診療の仲間を増やしながらネットワークを拡充し、さらに研鑽を積み続けたいと思っています。

西洋医学的治療と漢方治療のそれぞれの良さを活用することで、女性のライフサイクルのすべてにおいて、より高い治療効果が得られると思います。私は日常診療に漢方を活用することで、幅広くいろいろな面からアプローチができる医師を目指しています。(鈴木京子先生談)

